

抗菌薬意識調査レポート 2024

2024年10月3日

国立研究開発法人 国立国際医療研究センター病院
AMR臨床リファレンスセンター（厚生労働省委託事業）

■ 一般国民の抗菌薬(抗生物質)に関する認知度は上がったが、正しい知識は不十分である

- ・「抗菌薬・抗生物質」という言葉を聞いたことがあると回答した人は89.1%であった。昨年と比較して8.2ポイント増加した。
- ・「抗菌薬・抗生物質はウイルスをやっつける」に対して「間違っていると思う」と正しく回答した人は16.0%であった。
- ・「抗菌薬・抗生物質はかぜに効く」に対して「間違っていると思う」と正しく回答した人は25.9%であった。
- ・「抗菌薬・抗生物質は治ったら早くやめる方がよい」に対して「間違っていると思う」と正しく回答した人は30.4%であった。

■ 抗菌薬の不適切な使用は一部減少している可能性がある

- ・「家にとってある抗菌薬・抗生物質がある」と回答した人は17.3%であった。
- ・「とっておいた抗菌薬・抗生物質を自分で飲んだことがある」と回答した人は24.1%であった。
- ・「他人(家族など)の抗菌薬・抗生物質を飲んだことがある」と回答した人は20.1%であった。
- ・「とっておいた抗菌薬・抗生物質を人にあげたことがある」と回答した人は4.3%であった。昨年より2.4ポイント減少した。直近の3年間で年々減少している。
- ・「処方された抗菌薬・抗生物質を最後まで飲みきった」と回答した人は74.1%であった。昨年より3.8ポイント増加した。

■ 一般国民の薬剤耐性・薬剤耐性菌に関する認知度は昨年より上がった

- ・薬剤耐性、薬剤耐性菌という言葉を知ったと答えた人は42.8%であった。昨年より7.4ポイント増加した。

■ 若い世代ほどインターネット検索やAI診断の活用結果による行動変容が起きる可能性がある

- ・「体調不良時にネット検索やAI診断を活用したことがある」と回答した人は24.5%であった。
- ・「検索結果やAI診断結果で行動変容を促された」と回答した人は25.8%であった。そのうち、10代の35.3%、20代の35.0%が行動変容を促されたと回答しており、年代が上がるにつれ割合が低下する傾向を認めた。

■ 時間経過とともに「感染させない」ための行動規範が緩んできている可能性がある

- ・「発熱等の症状で学校や職場を休む」と回答した人は55.0%で昨年より1.6ポイント減少した。コロナ禍以前の2019年からは17.9ポイント増加しているが、コロナ禍の2022年をピークに2年連続で減少していた。
- ・「発熱等の症状で休んだ翌日、熱は下がったが、鼻水、咳、のどの痛みがある場合学校や職場を「休みたいが休めない」「休まない」と回答した人は68.2%であった。回答した人のうち会社員は、75.6%が「休みたいが休めない」「休まない」と回答した。また「休まない」理由の1位は「他者に迷惑をかける」であった。

■ 基本的な感染症対策は高水準で継続されている

- ・「こまめな手洗い」が83.6%、「咳エチケット」が75.8%で、それぞれ昨年より8.3ポイント、4ポイント増加した。一方、「マスクを着用する」が62.8%、「ワクチン接種」が42.5%で、それぞれ2.4ポイント、4.1ポイント減少した。

調査目的

感染症治療に必要な抗菌薬・抗生物質が効かない薬剤耐性(AMR)の問題が世界中で深刻化しています。日本でも2016年に「薬剤耐性(AMR)アクションプラン」が発表され、薬剤耐性についての取り組みが始まっています。薬剤耐性の問題は抗菌薬・抗生物質の不適切な使用が一因とされています。今回の調査は、抗菌薬・抗生物質、および薬剤耐性とは何かについて、現在一般の方がどのように認識されているのかを把握し、問題点と今後の取り組みの方向性を提示することを目的としています。

調査概要

調査期間：2024年7月

調査方法：インターネット調査

調査対象：全国の15歳以上の男女 全国727名

男性10代52名、20代50名、30代51名、40代53名、50代51名、60代55名、70代54名

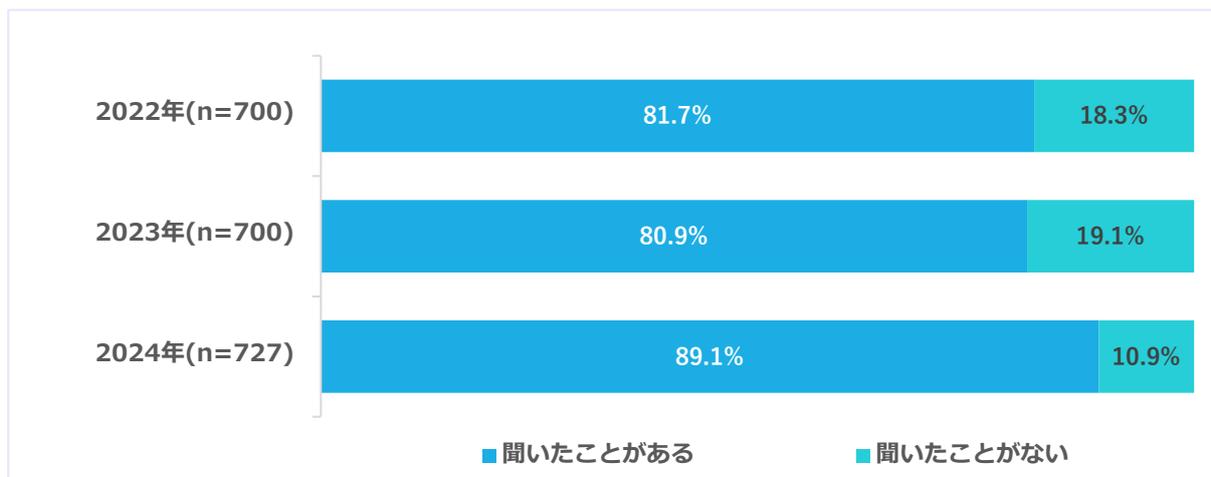
女性10代52名、20代51名、30代51名、40代52名、50代52名、60代53名、70代50名

設問一覧

- Q1 あなたは抗菌薬・抗生物質という言葉を知っていますか(単数回答、n=727)
- Q2 抗菌薬・抗生物質についてあなたが当てはまると思うものをお選びください
- Q2-1 抗菌薬・抗生物質はウイルスをやっつける(単数回答、n=648)
- Q2-2 抗菌薬・抗生物質はかぜに効く(単数回答、n=648)
- Q2-3 抗菌薬・抗生物質は治ったら早くやめる方がよい(単数回答、n=648)
- Q2-4 抗菌薬・抗生物質を飲むと下痢などの副作用がしばしばおきる(単数回答、n=648)
- Q3 抗菌薬・抗生物質に関する経験についてお答えください
- Q3-1 家にとってある抗菌薬・抗生物質がある(単数回答、n=648)
- Q3-2 かつておいた抗菌薬・抗生物質を自分で飲んだことがある(単数回答、n=648)
- Q3-3 他人(家族など)の抗菌薬・抗生物質を飲んだことがある(単数回答、n=648)
- Q3-4 抗菌薬・抗生物質を人にあげたことがある(単数回答、n=648)
- Q4 最近1年間で、熱・のどの痛み・咳・くしゃみなどの症状がでたときに病院を受診し、抗菌薬・抗生物質を処方されたことがありますか(単数回答、n=648)
- Q5 あなたが抗菌薬・抗生物質を処方された際の行動についてお答えください(単数回答、n=259)
- Q6 抗菌薬・抗生物質が有効な病気として当てはまると思うものをすべてお答えください(複数回答、n=727)
- Q7 あなたは薬剤耐性、薬剤耐性菌という言葉を知っていますか(単数回答、n=727)
- Q8 あなた自身や身近な人が近い将来(数年以内に)薬剤耐性菌の感染症(肺炎、尿路感染症など)にかかると思いますか(単数回答、n=727)
- Q9 体調不良時に医師にかかる前に症状についてネット検索やAI診断を活用したことがありますか(単数回答、n=727)
- Q10 検索結果やAI診断結果で行動変容を促されましたか(単数回答、n=178)
- Q11 朝起きたら、だるくて鼻水、咳、のどの痛みがあり、熱を測ったら37℃でした。あなたは学校や職場を休みますか(単数回答、n=727)
- Q12 だるさ、鼻水、咳、のどの痛みがあり、熱を測ったら37℃あったので、あなたは学校や職場を休みました。翌日、鼻水、咳、のどの痛みがあるが、熱は36度台以下に下がったとします。あなたは学校や職場を休みますか(単数回答、n=727)
- Q13 前問で休まないと答えた理由はなんですか(複数回答 = 496)
- Q14 今後の感染症予防対策として、行っていることを教えてください(単数回答、n=727)

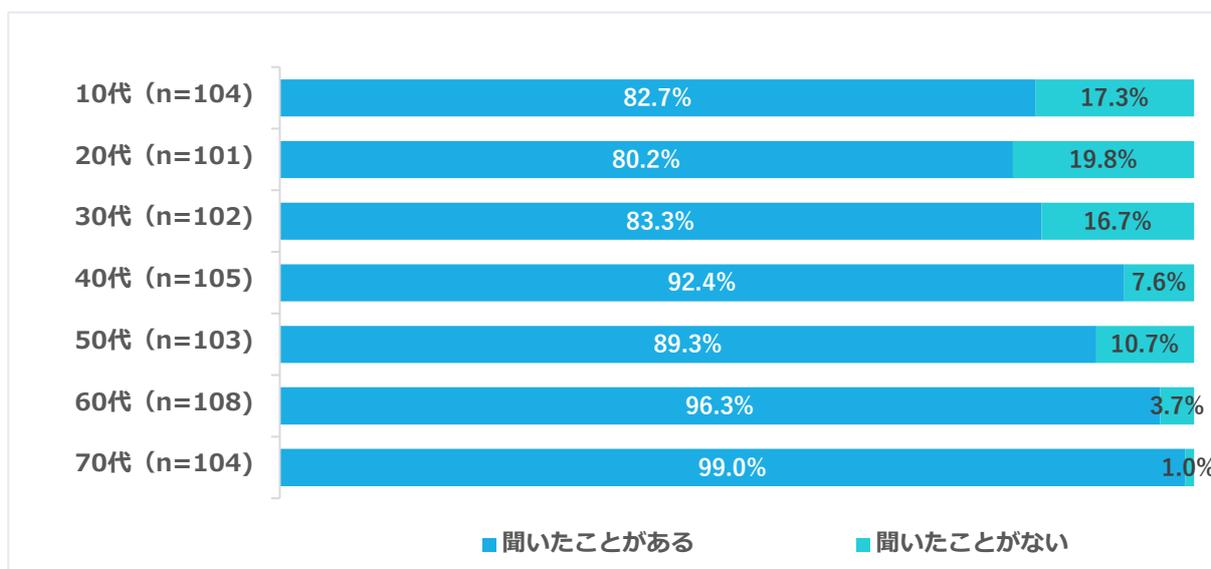
Q1 あなたは抗菌薬・抗生物質という言葉を知っていますか

(単数回答、n=727)



抗菌薬・抗生物質という言葉を知っている」と答えた人は89.1%であった。
「聞いたことがない」と答えたのは10.9%となった。
昨年よりも「聞いたことがある」が8.2ポイント増加した。

【年代別】

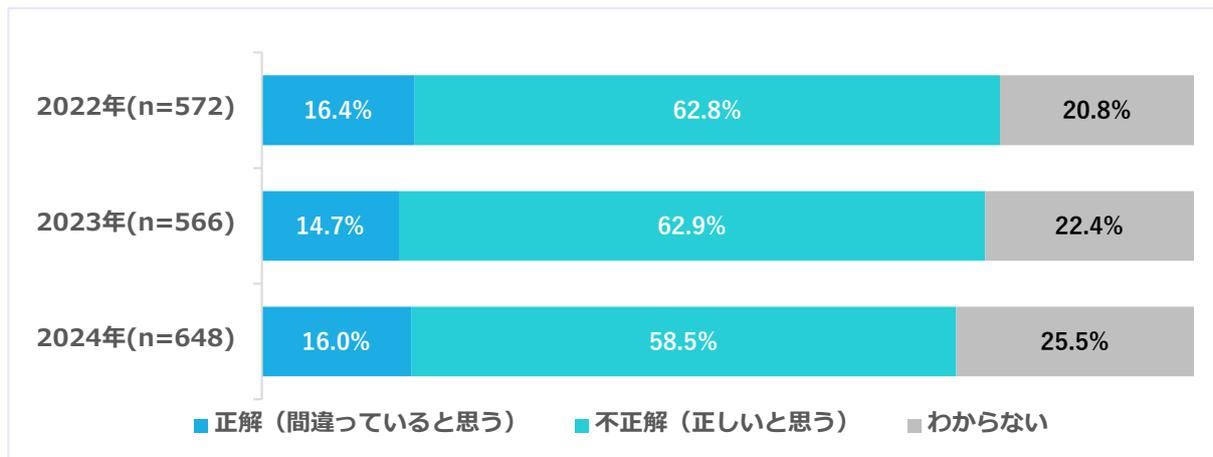


年代別で比較をすると、20代の認知度が最も低く80.2%、次いで10代で82.7%という結果となった。
若年層の認知度が低い傾向は変わっていない。

Q2 抗菌薬・抗生物質についてあなたが当てはまると思うものをお選びください

Q2-1 抗菌薬・抗生物質はウイルスをやっつける

(単数回答、n=648)

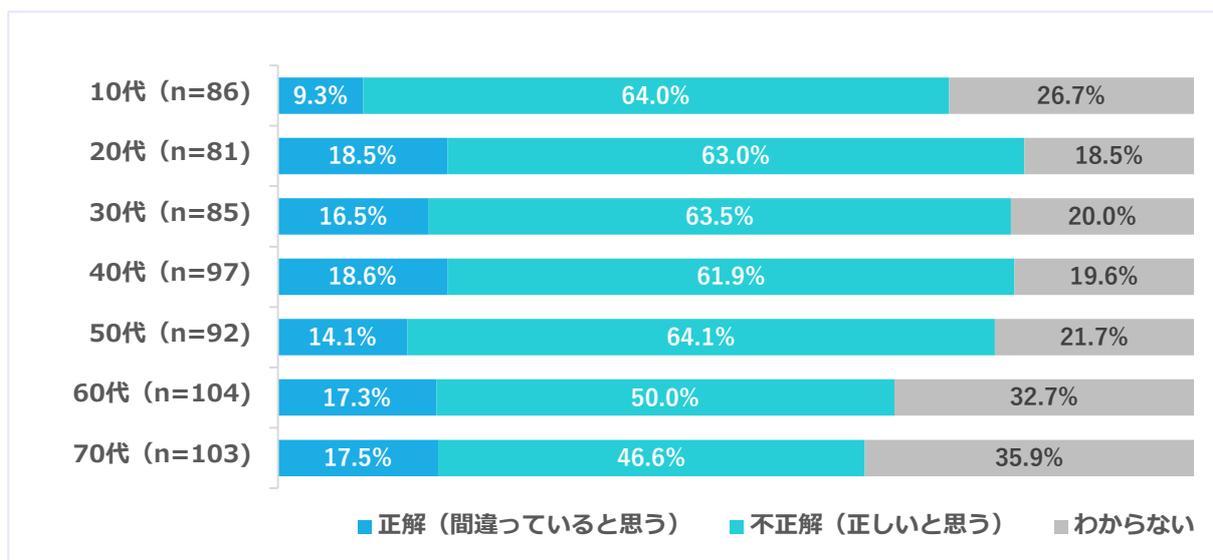


「抗菌薬・抗生物質という言葉聞いたことがある(Q1)」と回答した648人のうち、「抗菌薬・抗生物質はウイルスをやっつける」に対して「間違っていると思う」と正しく回答した人は16.0%、「正しいと思う」と回答した不正解の人は58.5%であった。

2023年から正解は1.3ポイント増えた。

不正解は4.4ポイント減ったが、「わからない」と回答した人が3.1ポイント増えた。

【年代別】

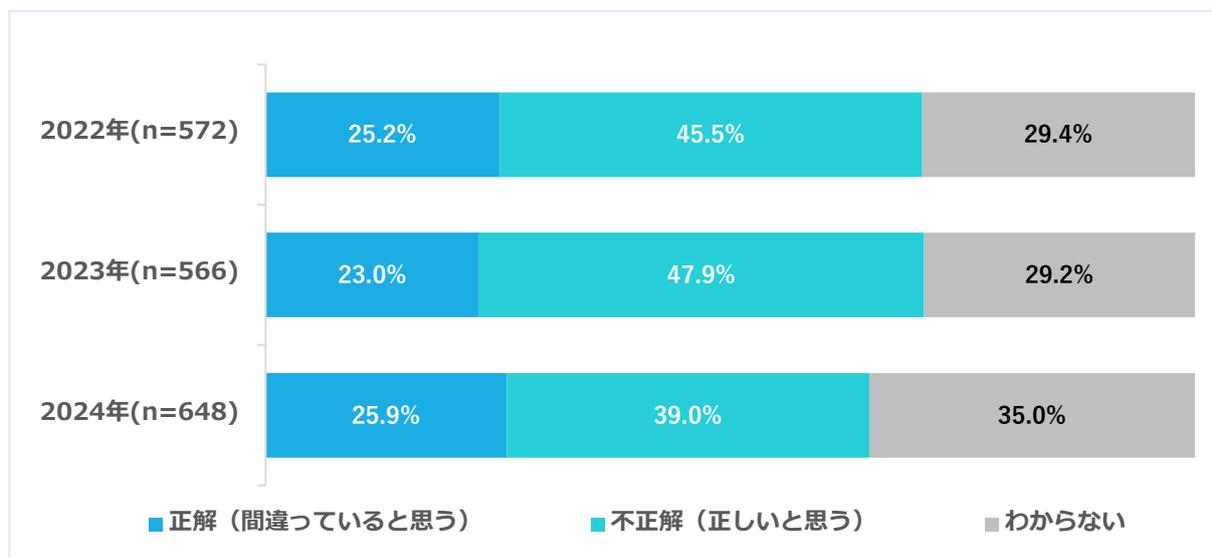


年代別で比較をすると、10代の正解者は9.3%と正解率が最も低く、不正解率も高い結果となった。70代の不正解者は不正解率が最も低い結果となったが、「わからない」と回答した率が最も高い結果となった。

Q2 抗菌薬・抗生物質についてあなたが当てはまると思うものをお選びください

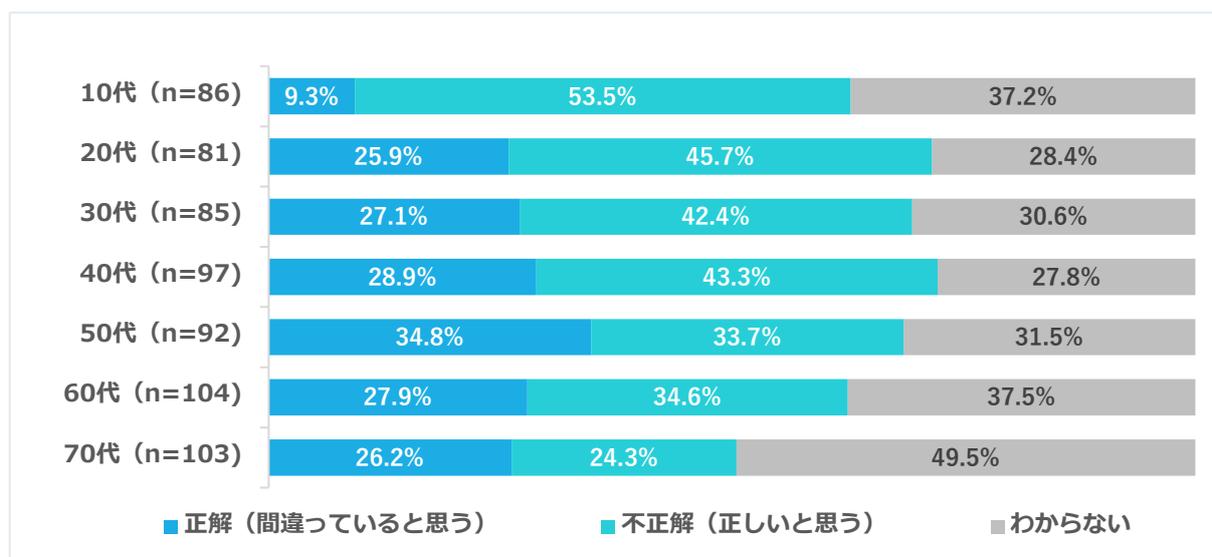
Q2-2 抗菌薬・抗生物質はかぜに効く

(単数回答、n=648)



「抗菌薬・抗生物質という言葉聞いたことがある(Q1)」と回答した648人のうち、「抗菌薬・抗生物質はかぜに効く」に対して「間違っていると思う」と正しく回答した人は25.9%、「正しいと思う」と回答した不正解の人は39.0%であった。2023年と比較すると正解率は2.9%増え、不正解率は8.9ポイント下がったが、「わからない」と回答した率も5.8ポイント増えた。

【年代別】

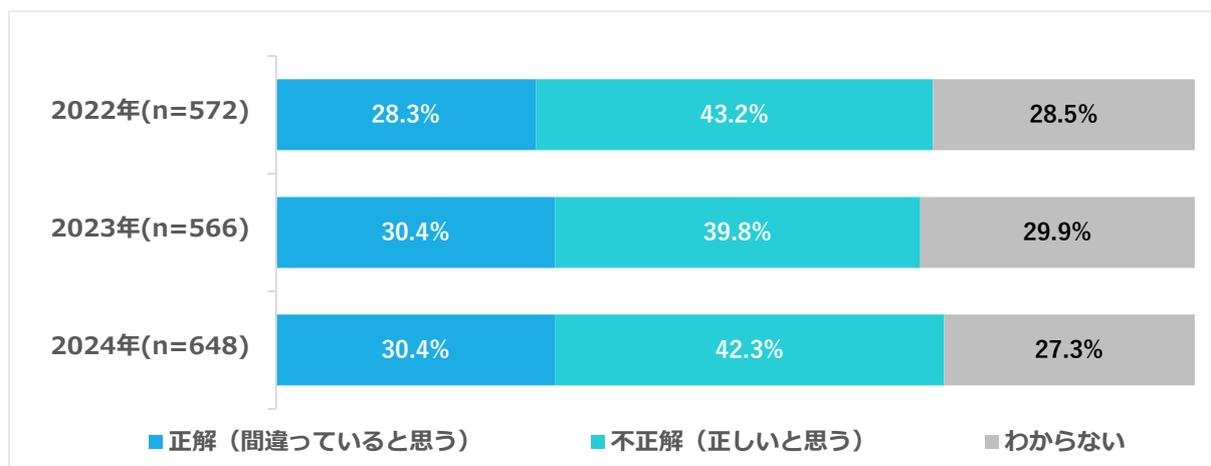


年代別で比較をすると、10代で正解率が低く9.3%、不正解率も53.5%が最も高い結果となった。50代の正解率が34.8%で最も高く、70代の不正解率が24.3%で最も低かった。

Q2 抗菌薬・抗生物質についてあなたが当てはまると思うものをお選びください

Q2-3 抗菌薬・抗生物質は治ったら早くやめる方がよい

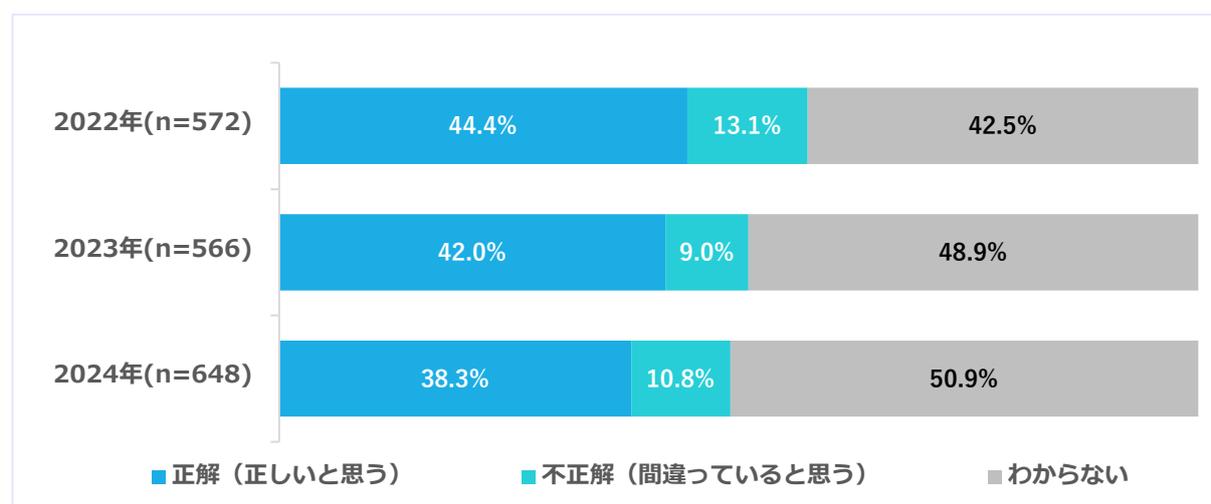
(単数回答、n=648)



「抗菌薬・抗生物質という言葉聞いたことがある(Q1)」と回答した人のうち、「抗菌薬・抗生物質は治ったら早くやめる方がよい」に対して「間違っていると思う」と正しく回答した人は30.4%であった。直近3年間で正解率はほぼ変化がない。

Q2-4 抗菌薬・抗生物質を飲むと下痢などの副作用がしばしばおきる

(単数回答、n=648)

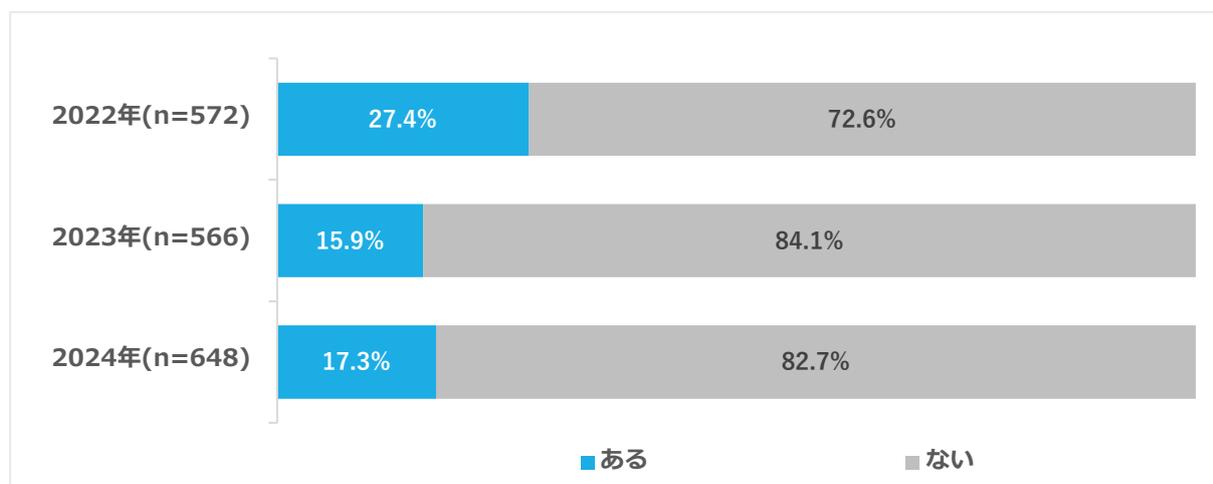


「抗菌薬・抗生物質という言葉聞いたことがある(Q1)」と回答した人のうち、「抗菌薬・抗生物質を飲むと下痢などの副作用がしばしばおきる」に対して「正しいと思う」と正しく回答した人は38.3%であった。

Q3 抗菌薬・抗生物質に関する経験についてお答えください

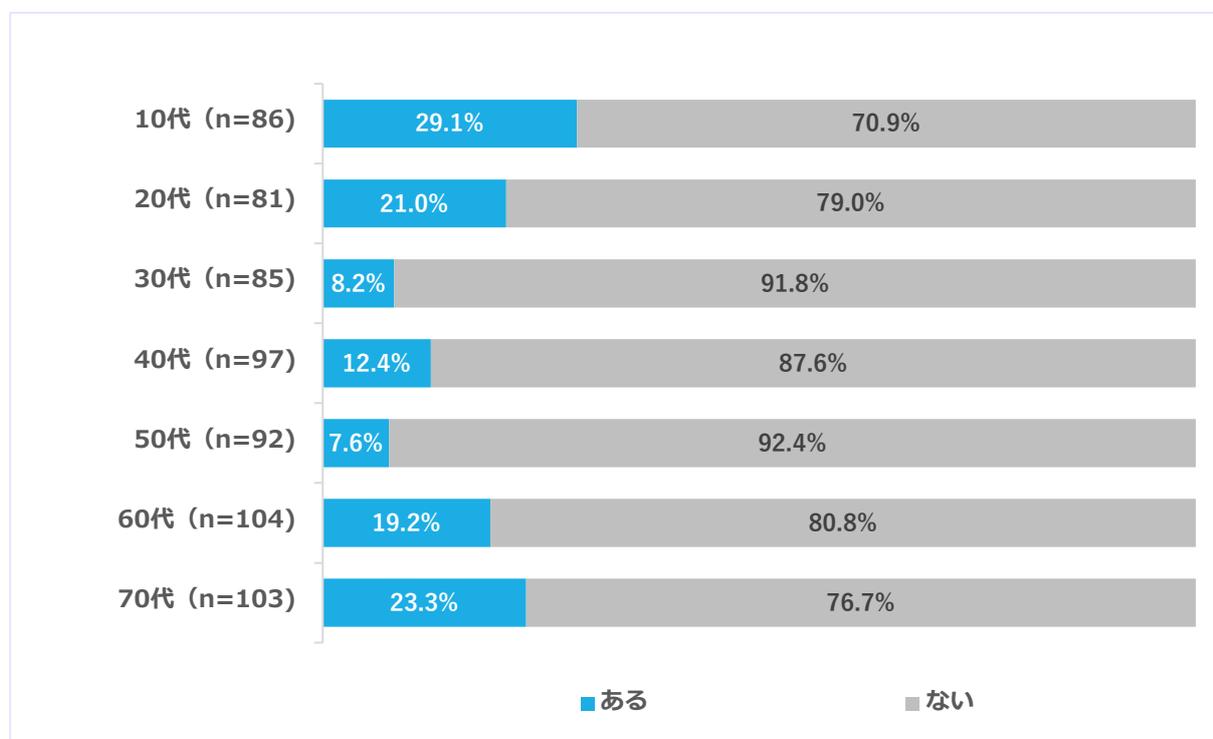
Q3-1 家にとってある抗菌薬・抗生物質がある

(単数回答、n=648)



「抗菌薬・抗生物質という言葉聞いたことがある(Q1)」と回答した人のうち、「家にとってある抗菌薬・抗生物質がある」に対して「ある」と回答した人は17.3%、「ない」と回答した人は82.7%であった。

【年代別】

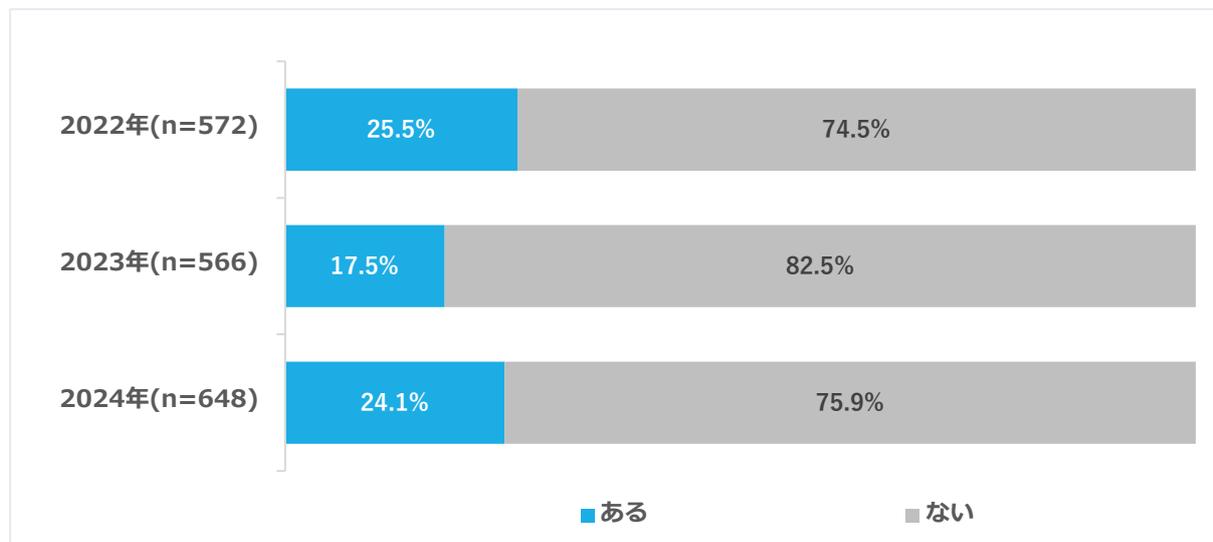


「抗菌薬・抗生物質という言葉聞いたことがある(Q1)」と回答した人のうち、「家にとってある抗菌薬・抗生物質がある」に対して年代別で比較をすると、10代は29.1%、20代は21.0%、60代は19.2%、70代は23.3%と若年層と高年層が高い数値となっている。

Q3 抗菌薬・抗生物質に関する経験についてお答えください

Q3-2 にとっておいた抗菌薬・抗生物質を自分で飲んだことがある

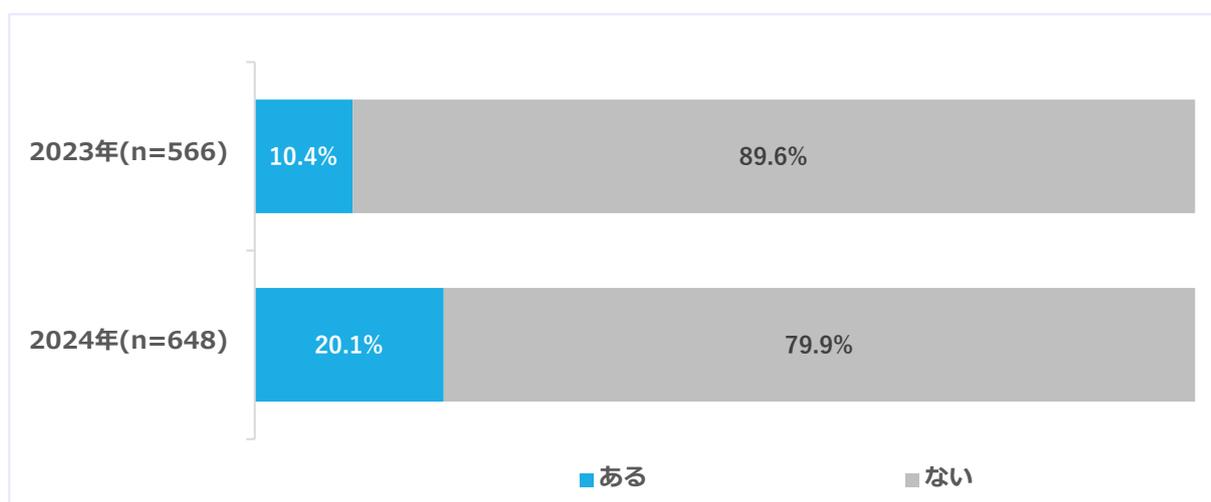
(単数回答、n=648)



「抗菌薬・抗生物質という言葉聞いたことがある(Q1)」と回答した人のうち、「にとっておいた抗菌薬・抗生物質を自分で飲んだことがある」に対して「ある」と回答した人は24.1%であった。昨年より8.0ポイント増え、2022年と近い結果となった。

Q3-3 他人(家族など)の抗菌薬・抗生物質を飲んだことがある

(単数回答、n=648)

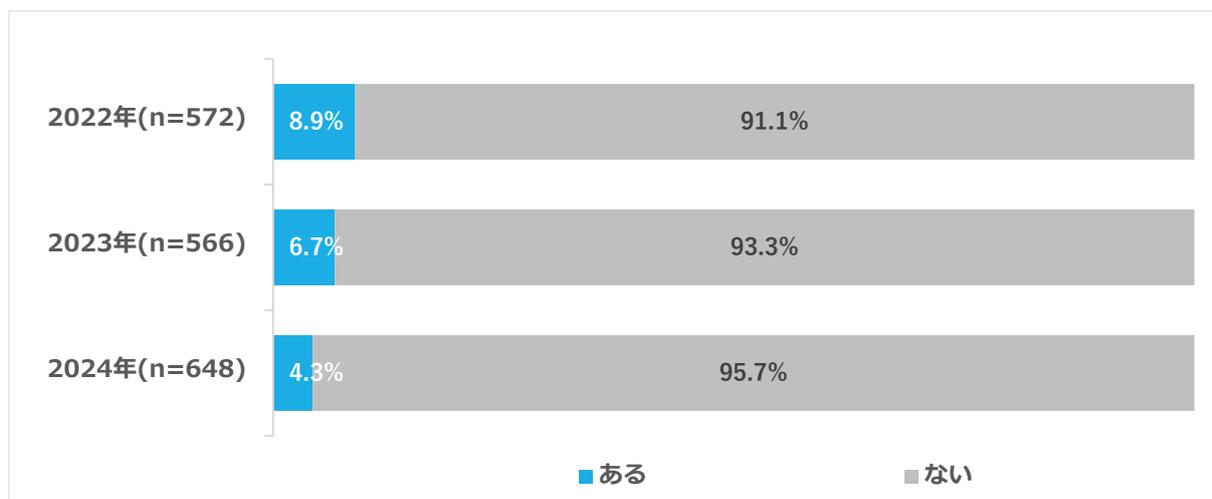


「抗菌薬・抗生物質という言葉聞いたことがある(Q1)」と回答した人のうち、「他人(家族など)の抗菌薬・抗生物質を飲んだことがある」人は20.1%で、昨年より9.7ポイント増えた。

Q3 抗菌薬・抗生物質に関する経験についてお答えください

Q3-4 抗菌薬・抗生物質を人にあげたことがある

(単数回答、n=648)

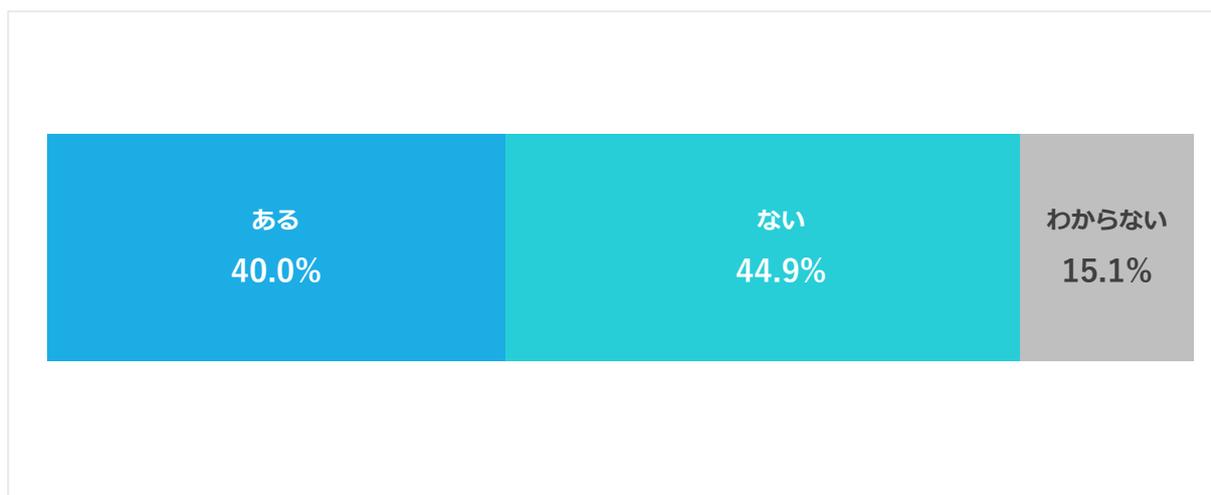


「抗菌薬・抗生物質という言葉聞いたことがある(Q1)」と回答した人のうち、「抗菌薬・抗生物質を人にあげたことがある」人は4.3%であった。直近3年間で年々減っている。

Q4

最近1年間で熱・のどの痛み・咳・くしゃみなどの症状がでたときに病院を受診し、抗菌薬・抗生物質を処方されたことがありますか

(単数回答、n=648)

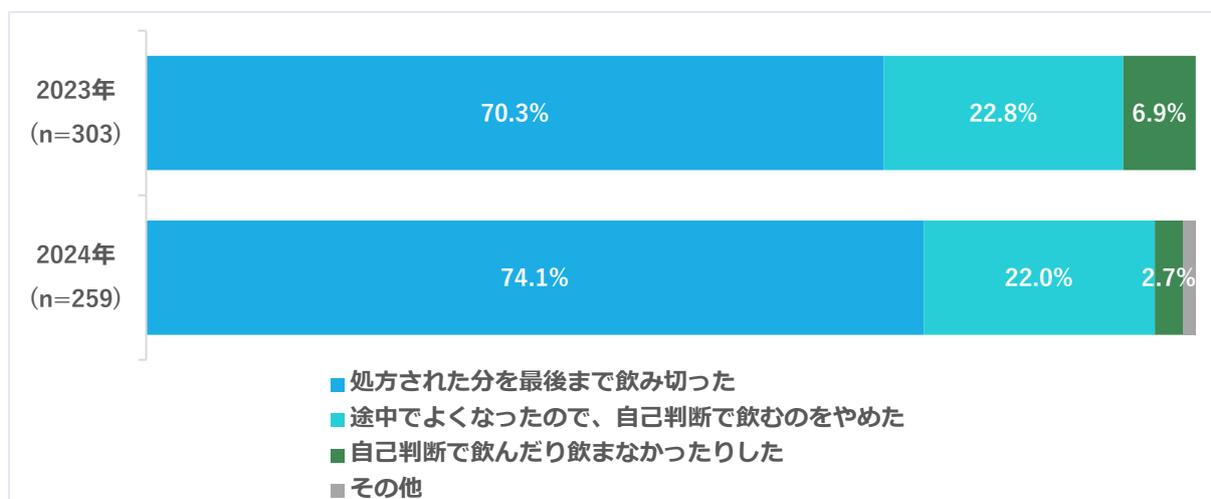


「抗菌薬・抗生物質という言葉聞いたことがある(Q1)」と回答した人のうち、「最近1年間で熱・のどの痛み・咳・くしゃみなどの症状がでたときに病院を受診し、抗菌薬・抗生物質を処方されたことがある」と回答した人は40.0%だった。

Q5

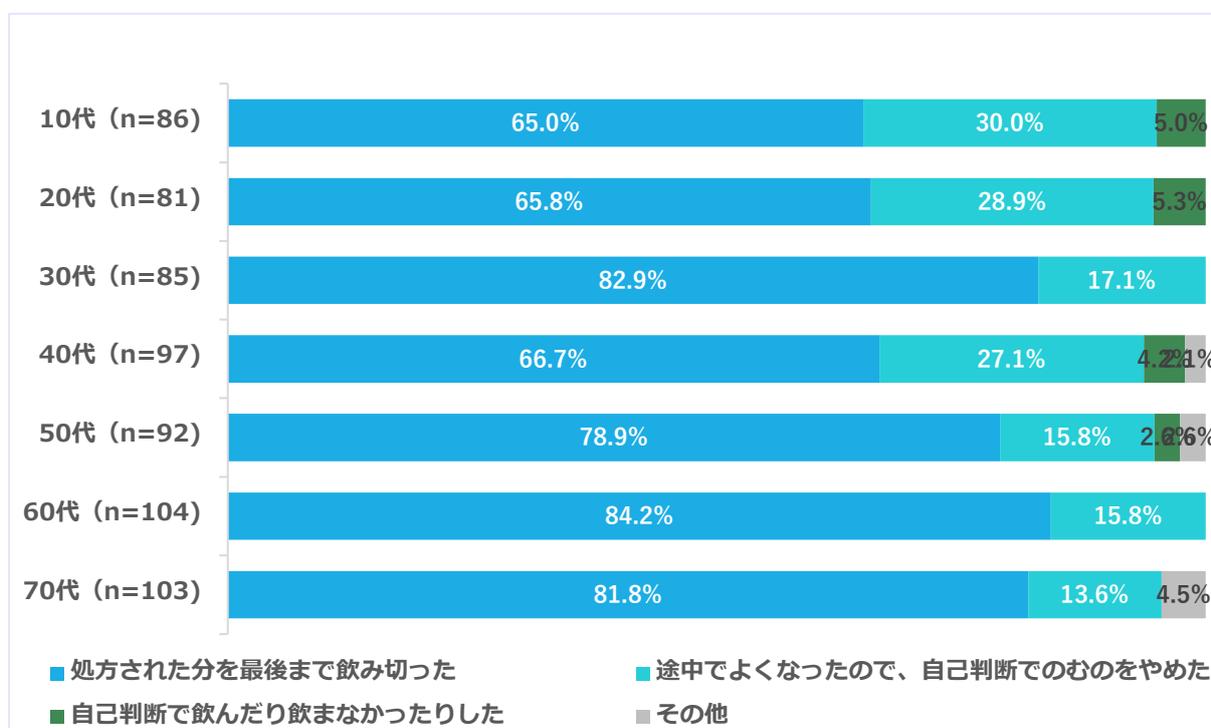
あなたが抗菌薬・抗生物質を処方された際の行動についてお答えください

(単数回答、n=259)



「抗菌薬・抗生物質という言葉聞いたことがある(Q1)」と回答した人のうち、「最近1年間で熱・のどの痛み・咳・くしゃみなどの症状がでたときに病院を受診し、抗菌薬・抗生物質を処方されたことがある(Q4)」と回答した人のうち、「処方された分を最後まで飲み切った」という適切な行動をとったと回答した人が最も多く74.1%だった。昨年よりも3.8ポイント増加した。

【年代別】

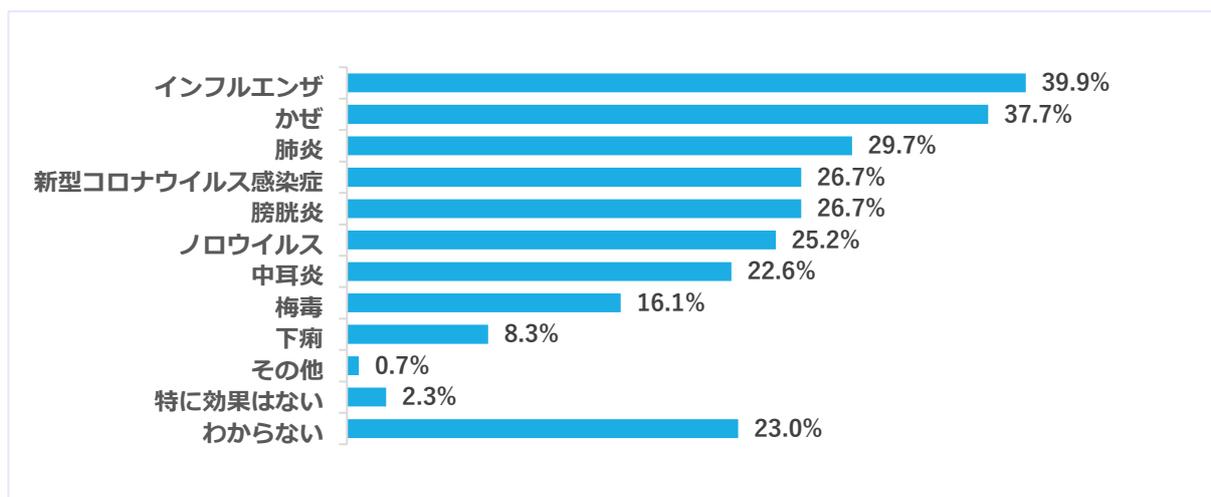


Q5の回答を年代別で比較をすると、

10代、20代、40代が「処方された分を最後まで飲み切った」(という適切な行動をとった)と回答した率が低い結果となった。

Q6 抗菌薬・抗生物質が有効な病気としてあてはまると思うものをすべてお答えください

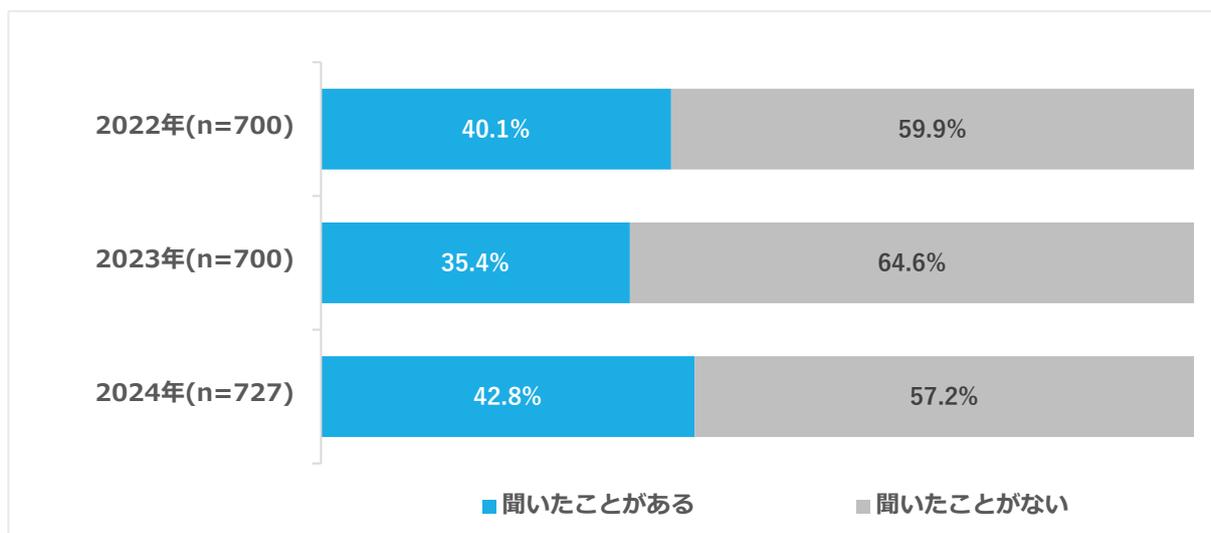
(複数回答、n=727)



抗菌薬・抗生物質が有効な病気としてあてはまると思うものを聞くと、「インフルエンザ」が最も多く39.9%が回答した。次いで、「かぜ」37.7%、「肺炎」29.7%であった。

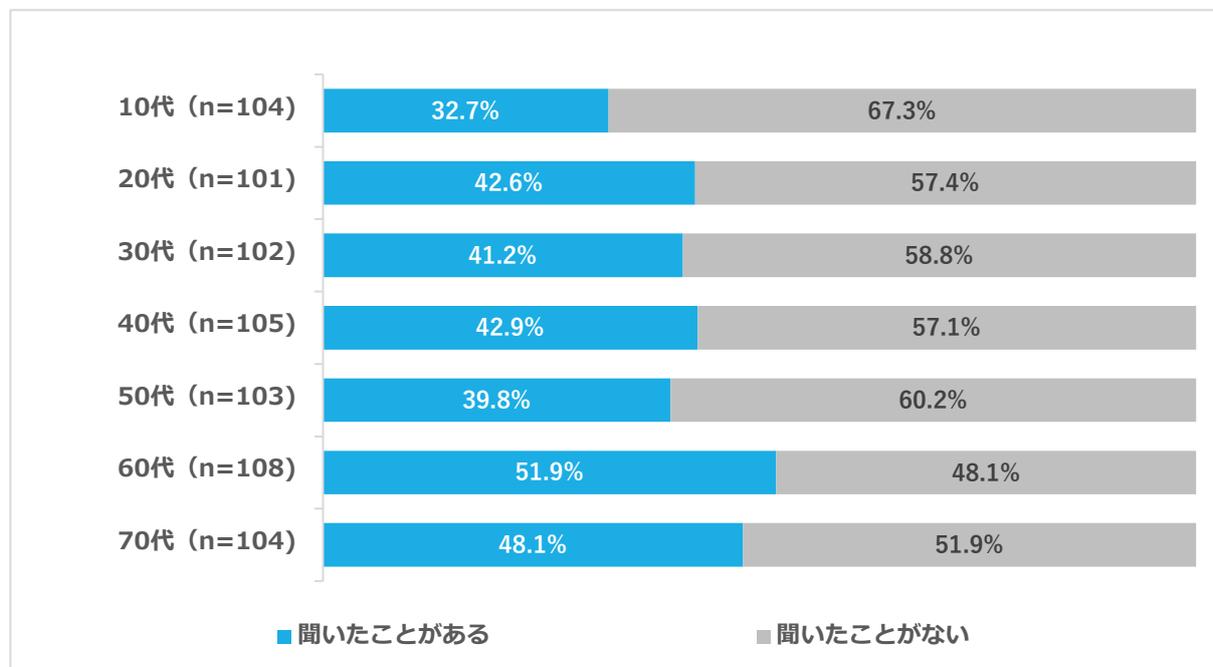
Q7 あなたは薬剤耐性、薬剤耐性菌という言葉を知っていますか

(単数回答、n=727)



薬剤耐性、薬剤耐性菌という言葉を知っている」と回答した人は42.8%、「聞いたことがない」と回答した人は57.2%であった。昨年より7.4ポイント増加した。

【年代別】



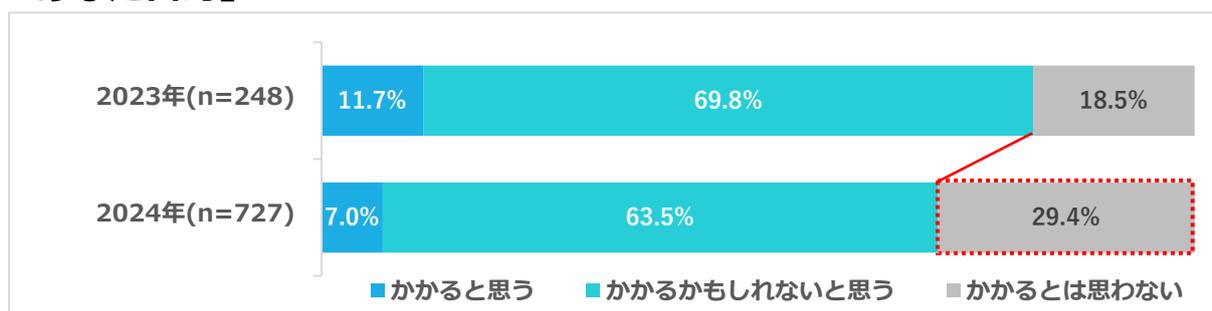
年代別にみると「聞いたことがある」と回答した人は10代が最も少なく32.7%、最も多いのは60代の51.9%、次いで70代の48.1%であった。

Q8

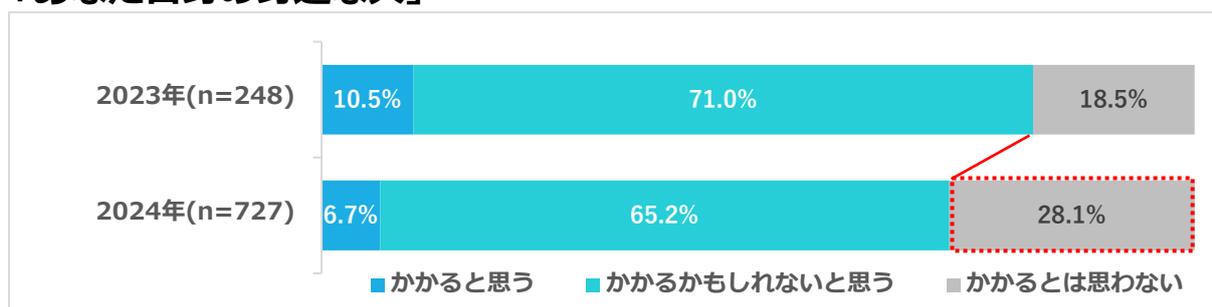
あなた自身や身近な人が近い将来（数年以内に）薬剤耐性菌の感染症（肺炎、尿路感染症など）にかかると思いますか

「あなた自身」

(単数回答、n=727)

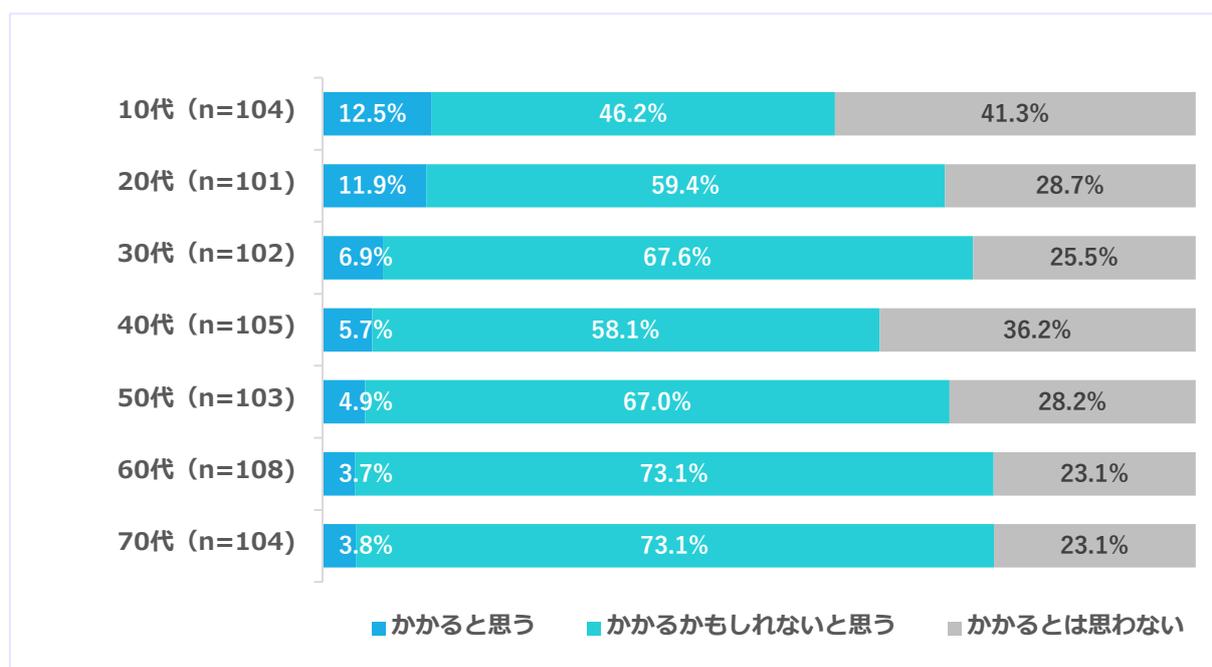


「あなた自身の身近な人」



「あなた自身や身近な人が近い将来(数年以内に)薬剤耐性菌の感染症(肺炎、尿路感染症など)にかかると思いますか」と聞いたところ、あなた自身が「かかるとは思わない」と回答した人は29.4%、で昨年より10.9ポイント増えた。あなた自身の身近な人が「かかるとは思わない」と回答した人は28.1%となり昨年より9.6ポイント増えた。

【年代別「あなた自身」】

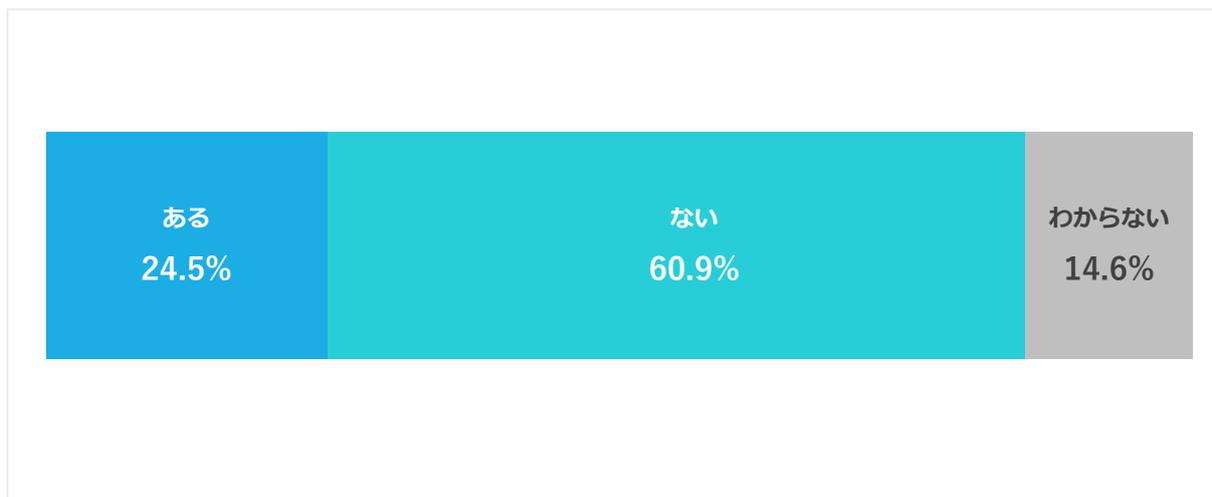


「あなた自身」について年代別に比較をすると、「かかるとは思わない」と回答した人の割合は10代で最も高く、60代、70代では比較的低かった。

Q9

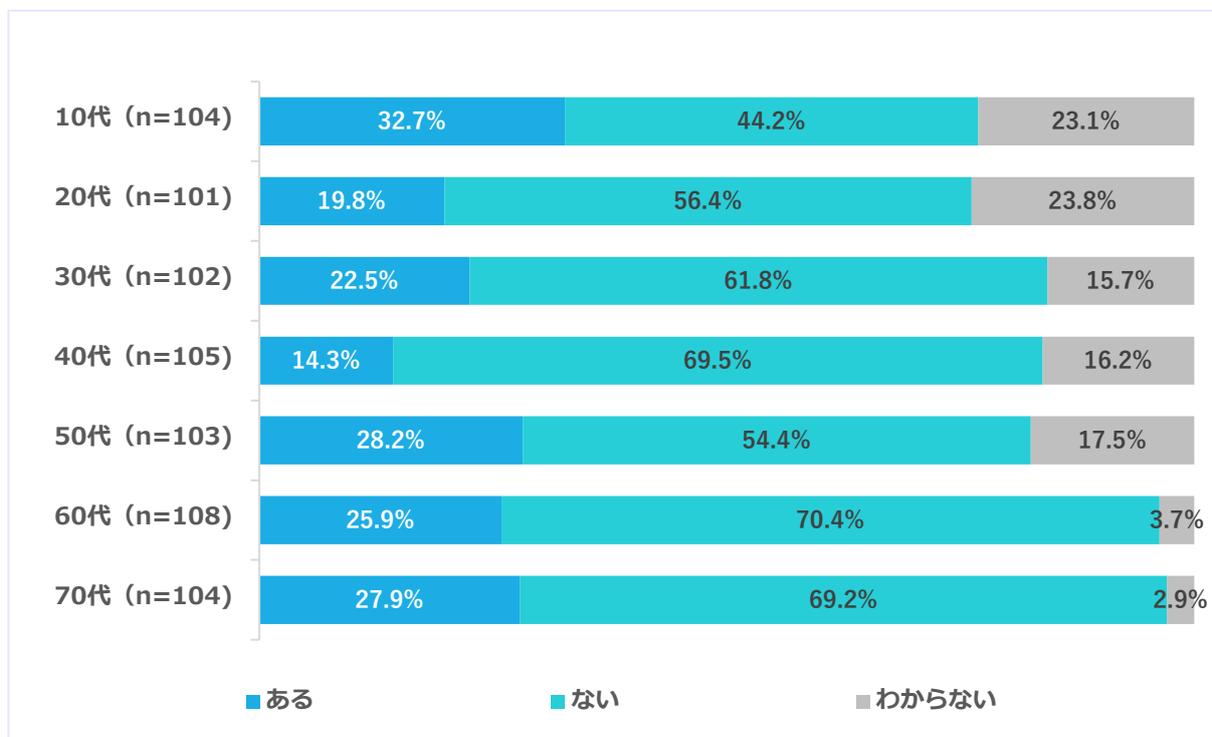
体調不良時に医師にかかる前に症状についてネット検索やAI診断を活用したことがありますか

(単数回答、n=727)



「体調不良時に医師にかかる前に症状について、ネット検索やAI診断を活用したことがありますか」と聞くと、「ある」が24.5%、「ない」が60.9%であった。

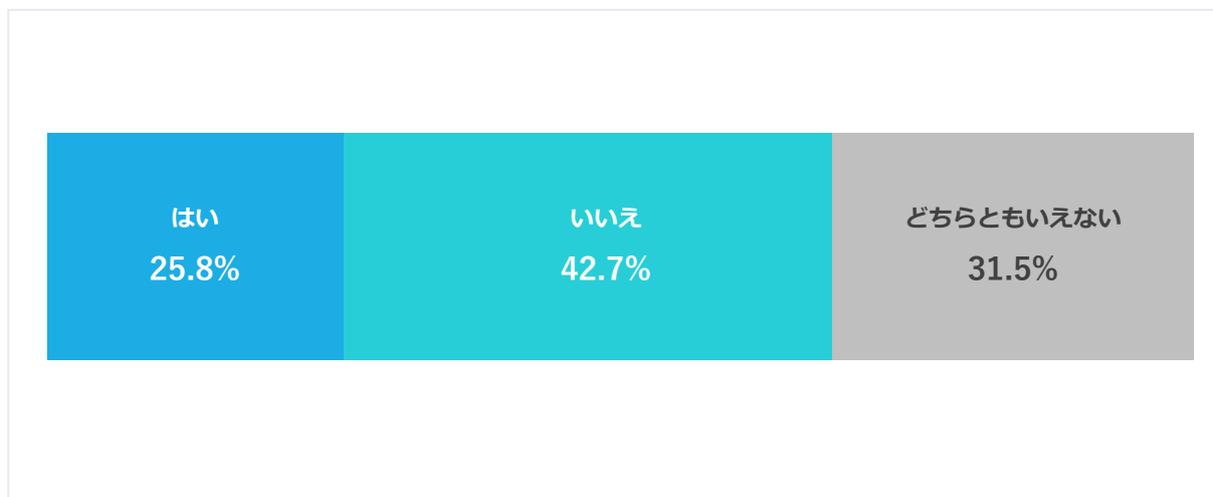
【年代別】



年代別に比較をしたところ、「ある」の回答率は10代が最も高く32.7%であった。「ない」の回答率は70代が最も高く69.2%、10代が最も低く44.2%であった。

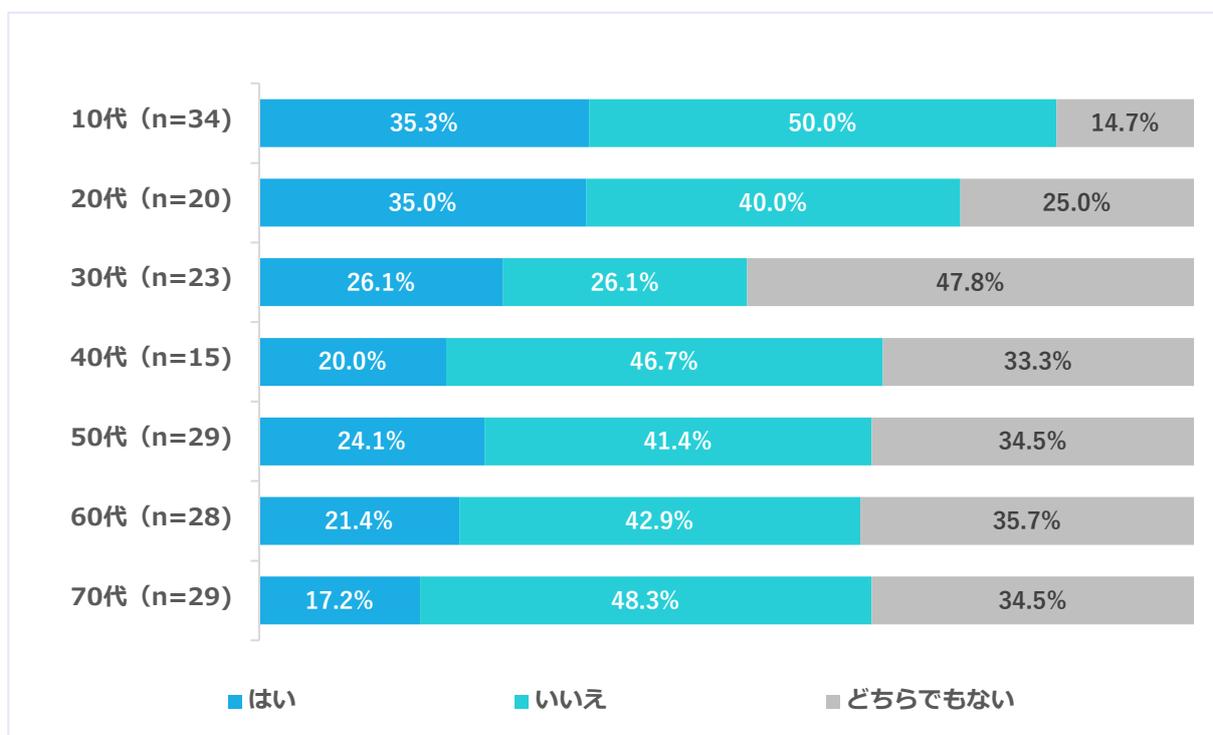
Q10 検索結果やAI診断結果で行動変容を促されましたか？

(単数回答、n=178)



「体調不良時に医師にかかる前に症状についてネット検索やAI診断を活用したことがある(Q8)」と答えた人のうち、「検索結果やAI診断結果で行動変容を促されたか」を聞くと、「いいえ」が最も多く42.7%、25.8%が「はい」と回答した。

【年代別】



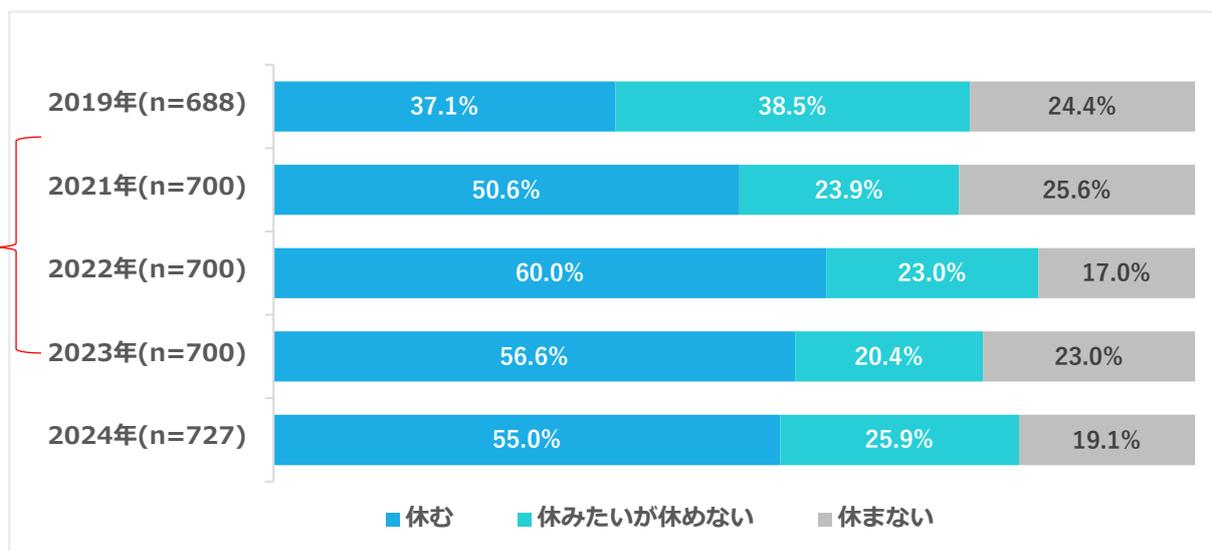
年代別に比較をすると、「はい」と回答した人は10代が35.3%、20代が35.0%、30代が26.1%であり、若年層ほど「検索結果やAI診断結果で行動変容を促された」と回答している結果となった。

Q11

朝起きたら、だるくて鼻水、咳、のどの痛みがあり、熱を測ったら37℃でした。あなたは学校や職場を休みますか

(単数回答、n=727)

コロナ禍



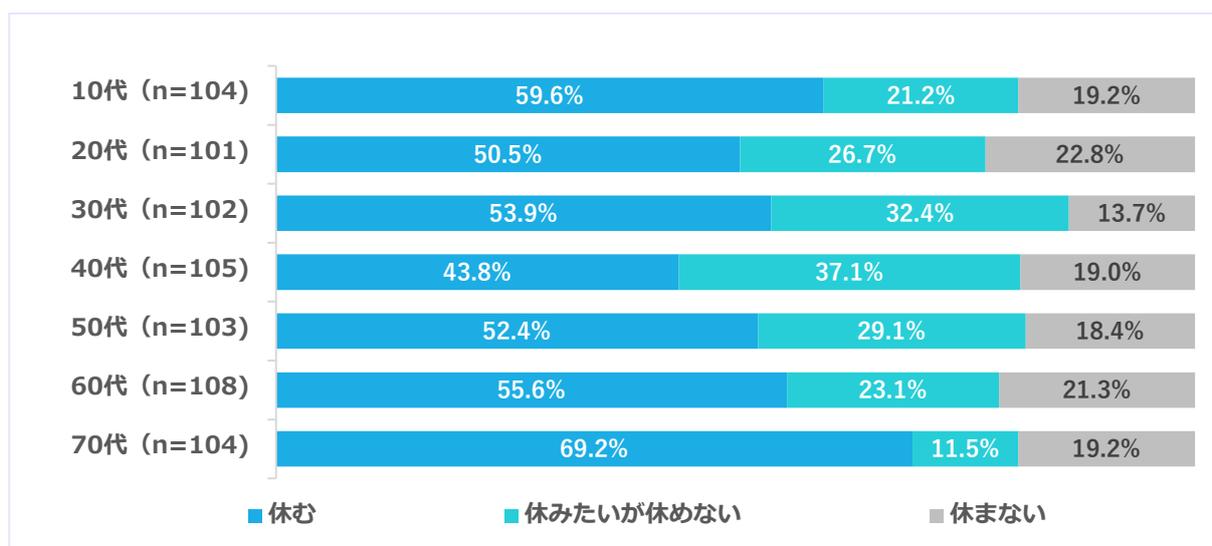
「休む」が55.0%で最も高かった。

「休みたいが休めない」、「休まない」をあわせ45.0%が結果的に「休まない・休めない」と回答した。

昨年より「休む」が1.6ポイント減り、「休まない・休めない」が5.5ポイント増加した。

また、コロナ禍にあった年と比較して「休まない・休めない」の割合が増加している。

【年代別】



年代別で比較をすると、40代が最も「休む」割合が低く43.8%という結果となった。

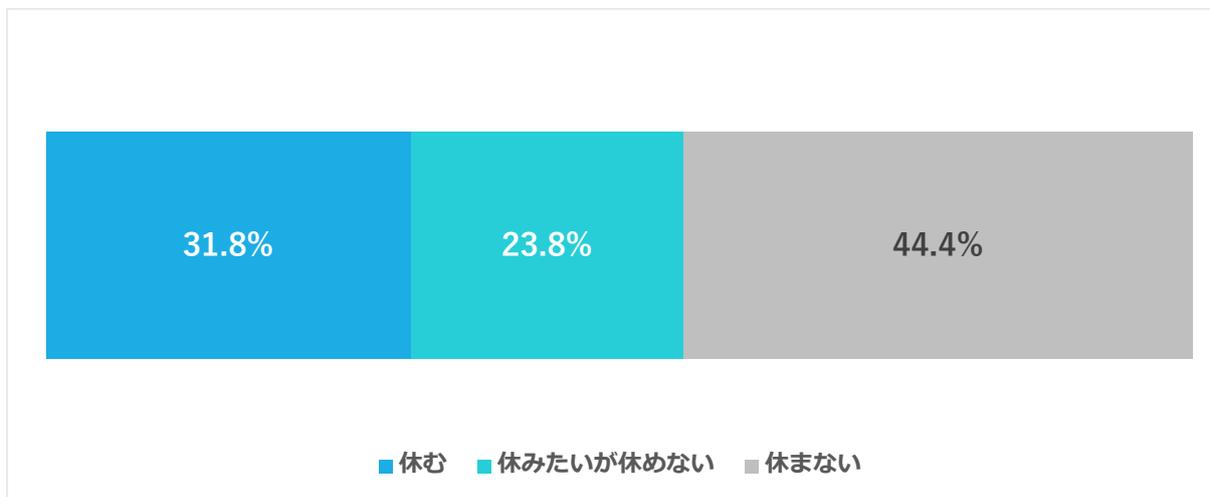
また、40代は「休みたいが休めない」という割合が最も高く37.1%であった。

「休む」割合は70代が69.2%で最も高く、次いで10代が59.6%であった。

Q12

だるさ、鼻水、咳、のどの痛みがあり、熱を測ったら37℃あったので、あなたは学校や職場を休みました。翌日、鼻水、咳、のどの痛みがあるが、熱は36度台以下に下がったとします。あなたは学校や職場を休みますか

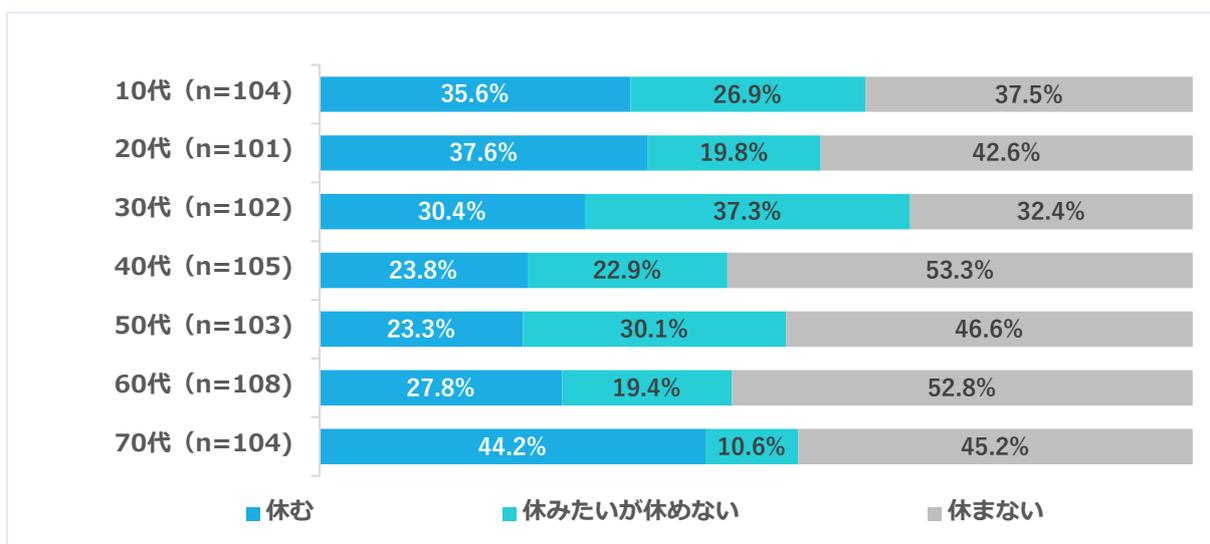
(単数回答、n=727)



「休まない」が44.4%で最も割合が高かった。

「休みたいが休めない」、「休まない」をあわせ68.2%が結果的に「休まない・休めない」と回答した。

【年代別】



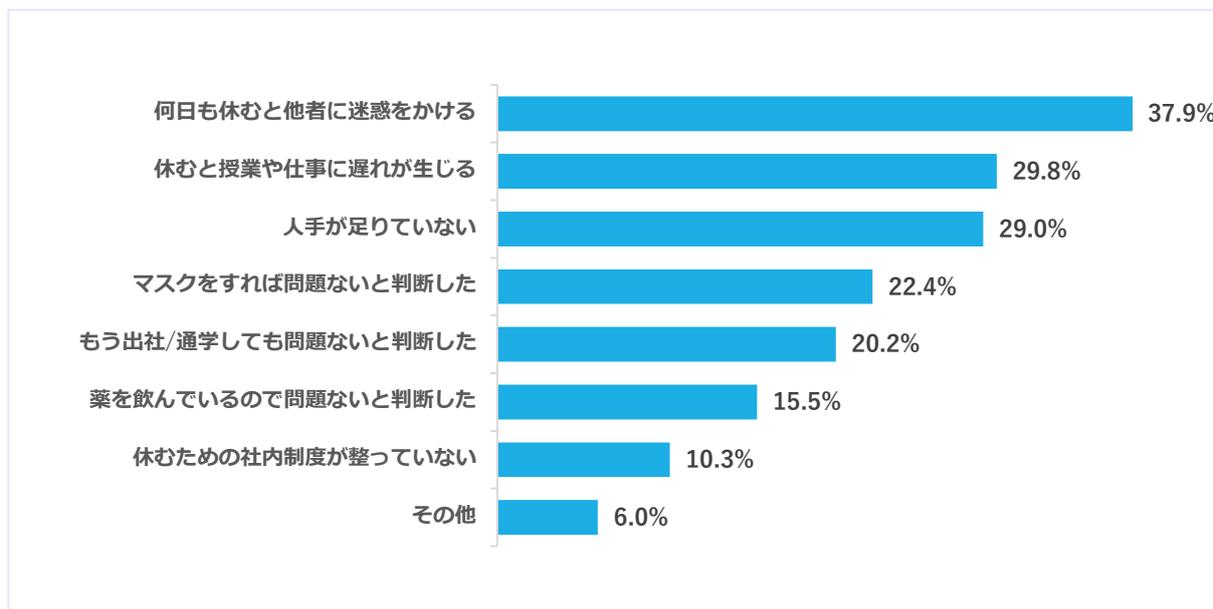
年代別で比較をすると、40代、50代がそれぞれ23.8%、23.3%と「休む」割合が低い結果となった。

「休みたいが休めない」割合は、30代が37.3%で最も高かった。

「休まない」と回答した割合は30代以下が4割前後であるが、40代以上は5割前後と高い回答であった。

Q13 前問で休まないと答えた理由はなんですか。

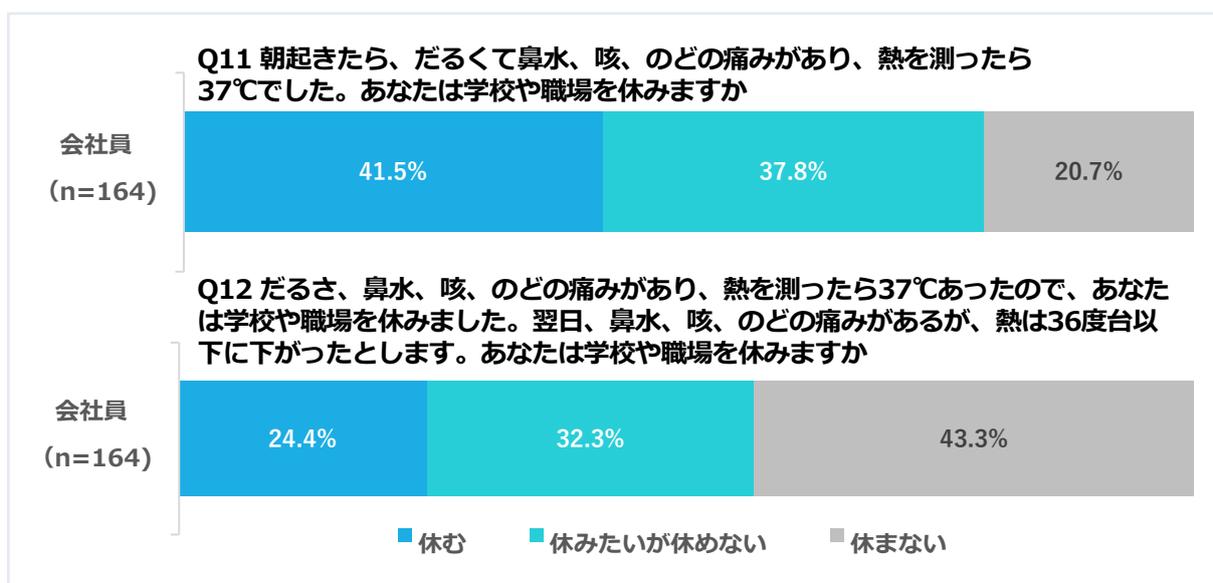
(複数回答、n=496)



前問で「休まない」と答えた理由を聞くと「何日も休むと他者に迷惑をかける」が、最も多い回答であった。

「その他」の回答では、「治ったと判断した」「体が動いたら行く」「在宅ワークで対応」「休んで給料を減らしたくない」「休みが承諾されない」などがあつた。

【参考（職業 = 会社員と選択した人の回答）】



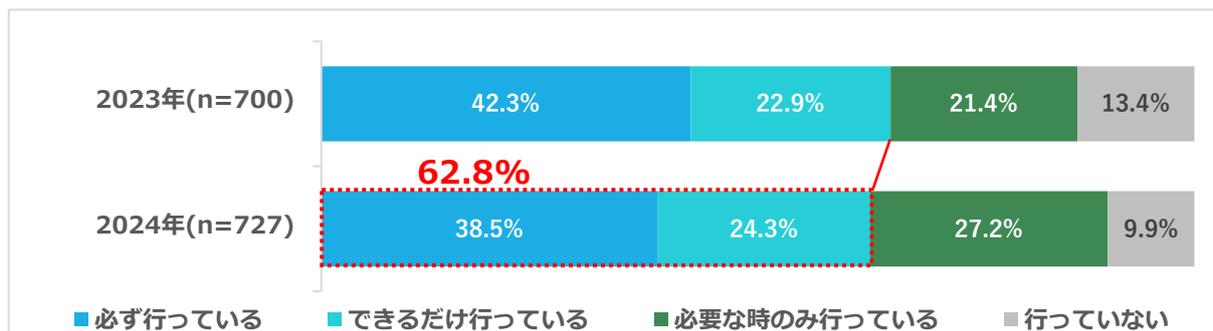
職業別（会社員、会社役員・管理職、公務員・団体職員、自営業、自由業・専門職、派遣・契約社員、パート・アルバイト、高校生、予備校生、専門学校生・短期大学生・大学生・大学院生、専業主婦・専業主夫、無職、その他）の会社員の回答では、Q10で「休みたいが休めない・休まない」の合計は58.5%で、全体の回答割合45.0%より13.5ポイント高い結果となった。

また、同じくQ11で「休みたいが休めない・休まない」の会社員の合計は75.6%で、全体の回答割合68.2%より7.4ポイント高い結果となった。

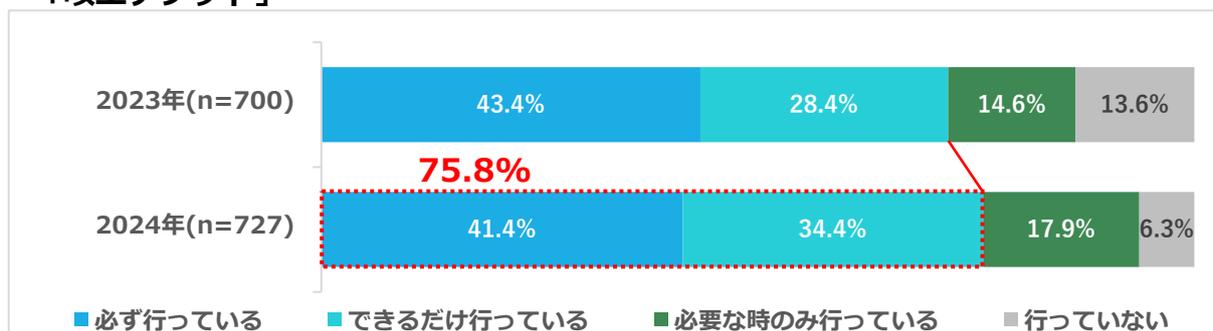
Q14 あなたが感染症予防対策として、行っていることをお答えください。

(単数回答、n=727)

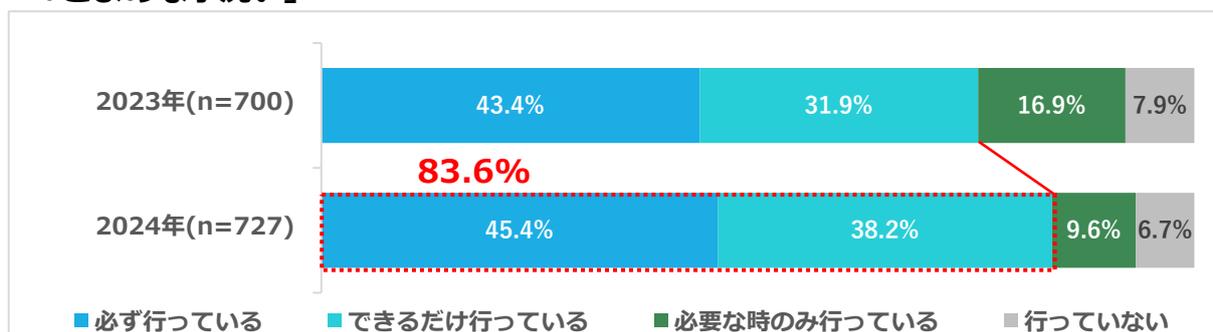
「マスクを着用する」



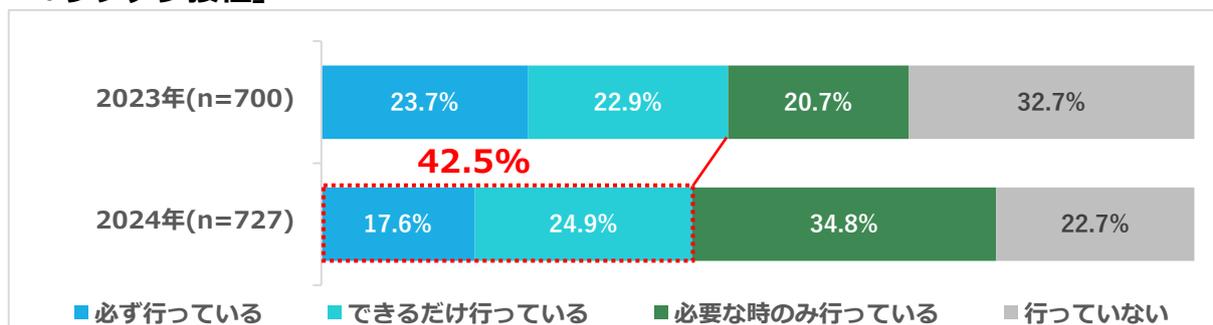
「咳エチケット」



「こまめな手洗い」



「ワクチン接種」



現在の感染症予防対策を「行っていない」と回答した人はすべての項目において昨年より減少した。また感染症予防対策として行っていることとして最も高い割合であったのは「こまめな手洗い」で「必ず行っている」「できるだけ行っている」をあわせると83.6%であった。

「咳エチケット」と「こまめな手洗い」を「必ず行っている」「できるだけ行っている」と回答した人が昨年より増加した一方、

「マスクを着用する」と「ワクチン接種」を「必ず行っている」「できるだけ行っている」と回答した人は昨年より減少し、「必要な時のみ行っている」を回答した人が昨年より増加した。

■ 抗菌薬・抗生物質に関して

・抗菌薬・抗生物質という言葉の認知度は2023年よりも改善し約9割となり、ほとんどの人が聞いたことがあるという状況だが、言葉の内容に関する正しい理解はあまり進んでいないことがうかがわれる。

(抗菌薬に関する知識)

・「抗菌薬・抗生物質はウイルスをやっつける」、「抗菌薬・抗生物質はかぜに効く」を「間違っている」と正しく回答した人の割合は、2024年はそれぞれ16.0%、25.9%であった。2023年との比較では数値の改善を認めるが、2022年と比べた場合はほとんど差がなく、解釈には注意が必要である。また、「抗菌薬・抗生物質は治ったら早くやめる方がよい」を「間違っている」と正しく回答した人の割合は30.4%、「抗菌薬・抗生物質を飲むと下痢などの副作用がしばしばおきる」が正しいと回答した人は38.3%で、過去2年と比較すると徐々に低下しているが、抗菌薬以外でも下痢などの副作用を起こすことがあると考えた人は、正解を選ばなかった可能性なども考えられる。

・正しい知識をもっているかどうかを正確に把握するため、「わからない」という選択肢を用意しているが、質問によっては「わからない」を回答した人が増えているものもある。誤った知識をもっていた人たちが正しい知識をもつようになる「移行期」であるという考え方もあるが、現時点での評価は困難である。

・抗菌薬・抗生物質が有効な病気として「インフルエンザ」「かぜ」を挙げた人はそれぞれ39.9%、37.7%にのぼった。一般国民の「抗菌薬がどのような薬か」についての理解は十分ではなく、啓発活動および患者教育の強化の必要性が考慮される。

(抗菌薬に関する経験・行動)

・Q3-1、2、3、4はいずれも「抗菌薬の不適切な使用」に関連する質問であるため、いずれの質問も「ない」という回答がより適切な行動である。

・「家にとってある抗菌薬・抗生物質がある」と回答した人は、2024年は17.3%であり、「とっておいた抗菌薬・抗生物質を自分で飲んだことがある」と回答した人は24.1%、「他人(家族など)の抗菌薬・抗生物質を飲んだことがある」と回答した人は20.1%であった。いずれも昨年度よりも上昇しており、継続的な改善傾向は認められていない。ただし今回の質問では、いつ「不適切と考えられる抗菌薬の使用」を行ったかを限定していないことから、直近における行動変容が結果に反映されなかった可能性がある。

・「とっておいた抗菌薬・抗生物質を人にあげたことがある」と回答した人は4.3%であり、直近の3年間では減少傾向であった。

・「抗菌薬・抗生物質を処方された際の行動」に関する設問で、「処方された分を最後まで飲み切った」と回答した人の割合は74.1%であった。2023年よりわずかに改善しているが、およそ1/4の人は抗菌薬を適切に内服できていない可能性がある。

■ 薬剤耐性、薬剤耐性菌に関して

・薬剤耐性、薬剤耐性菌という言葉を知ったことがある人は42.8%であり、2023年との比較では7.4ポイント上昇した。ただし2022年との差は2.7ポイントであり、改善傾向が今後も持続するかについては慎重に経過をみる必要がある。また、現時点で半数以上の回答者が薬剤耐性・薬剤耐性菌という言葉を知ったことがないことも事実であり、一般国民に対する情報発信について、より効果の高い方法についても検討していく必要がある。

・「あなた自身や身近な人が近い将来（数年以内に）薬剤耐性菌の感染症にかかると思うか」という設問に対し、「かかると思わない」と答えた人の割合は29.4%（あなた自身）、28.1%（身近な人）であった。薬剤耐性菌が病院内だけでなく、市中感染症の原因にもなりつつある中で、一般国民のリスク認知度は十分ではないおそれがある。

■ インターネット検索・AI診断に関して

・受診前にインターネット検索やAI診断を活用したことがあると回答した人の割合は24.5%であり、世代間で明らかな傾向は認められなかった。インターネット検索やAI診断の結果で行動変容を促されたと回答した人の割合は25.8%であったが、こちらは若年層の方が高い傾向が認められた。若年層を対象として教育啓発・情報発信を行う場合、インターネットやAIを用いた手法が効果的である可能性が示唆された。

■感染対策に関して

- ・感染対策は、薬剤耐性(AMR)対策において抗菌薬の適正使用に並んで重要であるため、意識調査の対象としている。
- ・発熱など体調不良の時に学校や職場を「休む」という回答は今回55.0%であり、2023年の56.6%より若干減少した。また「休みたくても休めない」人は2023年に20.4%であったのに対して2024年は25.9%であり、コロナ流行後初めて上昇に転じた。新型コロナウイルス感染症の流行が始まってから数年が経過しており、一般国民の感染予防に対する意識が徐々に低下し始めている可能性がある。
- ・咳エチケットやこまめな手洗いについてはそれぞれ75.8%、83.6%の人が「必ず行っている」「できるだけ行っている」と回答しており、比較的高い水準で感染対策行動が継続されていると考えられた。一方でマスクの着用やワクチン接種については、昨年度と比較して積極的な行動をとると回答した人の比率は若干低下しているため、注意して経過をみる必要があると考えられる。

AMR対策の必要性

～抗菌薬・抗生物質は不適切な使用により、本当に必要な時に効かなくなってしまう～

抗菌薬・抗生物質は細菌が増えるのを抑えたり、殺したりする薬です。しかし、細菌もさまざまな手段を使って生き延びようとします。本来ならば効くはずの抗菌薬・抗生物質が効かなくなることを、「薬剤耐性(AMR: Antimicrobial resistance)」といいます。2019年4月29日、国際連合は抗微生物薬が効きにくい「薬剤耐性菌」が世界的に増加し、危機的状況にあるとして各国に対策を勧告しています※。

また、日本では2種類の「薬剤耐性菌」によって2017年に国内で約8,000人が死亡したとの推計が出ており、深刻な影響が懸念されています。

日本では外来での抗菌薬・抗生物質使用が9割以上を占めており、外来診療における抗菌薬・抗生物質の適正使用を推進することが不可欠といえます。

※ No Time to Wait: Securing the future from drug-resistant infections
Report to the Secretary-General of the United Nations April 2019

https://cdn.who.int/media/docs/default-source/documents/documents/no-time-to-wait-securing-the-future-from-drug-resistant-infections-en.pdf?sfvrsn=5b424d7_6&download=true